

互恵的相互依存関係過程モデルの提案

Proposal of Reciprocal Interdependent Relationships Process Models

田中 優*
Masashi TANAKA

<キーワード>

互恵的相互依存関係, 互恵的相互依存関係過程モデル, 個人内過程モデル,
個人間過程モデル

<要 約>

本論では, ある程度持続する親密な対人関係において, 利己的な動機, および, 愛他的な動機に基づいて継続的におこなわれる依存と支援の双方向のやりとりから, 対人関係のあり様をより現実的・文脈的な視点より説明することを目的としている。つまり, 本論で問題とする「相互依存関係」には, 互恵的な動機に基づく依存と支援の双方向のやりとりが含まれることを前提としており, このことを強調するために, 親密な対人関係における相互依存関係を「互恵的相互依存関係」と表現する。そして, 「互恵的相互依存関係」を2つのレベルでとらえる。第1のレベルは, 対人関係を構成する個人と個人, すなわち, 個人間での相互依存関係である。第2のレベルは, 対人関係を構成するそれぞれの当事者が, 個人内でいざく依存欲求と支援欲求との相互規定性である。これらに従い, 「互恵的相互依存関係」に関わる当事者の間で交わされる依存行動と支援行動の双方向の影響過程を説明する「互恵的相互依存関係の個人間過程モデル」と「個人間互恵的相互依存関係」の成立要件である個人内における依存欲求と支援欲求の双方向の規定過程を説明する「互恵的相互依存関係の個人内過程モデル」を提案した。

1. 「互恵」、「互恵的」という概念について

(1) 2つのタイプの対人関係：共同的关系と交換的关系

Clark & Mills(1979)は、二者の交換を支配する規則、あるいは、規範に基づき、交換的关系と共同的关系の2つのタイプの対人関係があることを指摘している。まず、交換的关系とは、過去に受け取った何らかの利得によって生じた借りを返すために、あるいは、将来に特定のお返しを受け取れることを期待して、利得が供与される。このような関係は、見ず知らずの他人、顔見知りの知人、仕事上のつき合い程度の他者などとの浅い関係にみられる。一方、共同的关系では、利得が相手の欲求に応じて与えられたり、特定の見返りを期待せずに相手を満足させるために与えられる。このような関係は、家族関係、恋愛関係、友人関係などの親密な関係にみられる。

Clark, Ouellette, Powell & Milberg (1987) は、個人が共同的关系と交換的关系をどの程度志向するかについての個人差変数として、共同的关系志向性と交換的关系志向性があると指摘している。さらに、諸井(1993)は、この2つの関係志向性が独立であることを明らかにしている。

Clarkらの2つのタイプの関係を衡平理論の視点からみると、交換的关系においては、利得の均衡状態、つまり、過剰利得状態や過少利得状態、あるいは、互恵的(均衡)状態が重要になる。他方、共同的关系においては、二者間における利得の均衡状態は重要ではなく、利得を受ける相手の満足が重要となる。つまり、交換的关系は衡平理論から説明できるが、共同的关系は衡平理論から説明することはできないのである。

(2) 援助行動研究とソーシャル・サポート研究における「互恵」、および、「互恵的」という用語の捉え方の違い

「互恵」、および、「互恵的」という用語の意味を考えると、Gouldner(1960)の「受け取った恩恵に対しては、同等の恩恵を返報しなければならない」という互恵規範の考え方がその基礎とな

る。しかしながら、社会心理学における援助行動研究とソーシャル・サポート研究の間には、その捉え方に、以下のような違いがみられる。

まず、援助行動研究においては、援助行動を規定する要因の1つとして、互恵規範を挙げている。すなわち、①援助が被援助者に多大な効果をもたらした場合、②援助者が苦しいなかで助けを申し出てくれた場合、③その援助が利己的動機からではなく愛他的動機による場合、そして、④援助者が自発的あるいは意図的に援助してくれたと認知した場合に、被援助者は援助を高く評価し、援助者に対して返礼をより熱心に試みる(西川, 1987)。すなわち、互恵規範による援助行動の説明では、①被援助者が得た恩恵、②援助者のコスト、③援助者の愛他的動機、そして、④援助の自発性が、援助行動の生起を左右するとされている。また、被援助者が、自分が受けた援助を援助者の自分に対する好意的関心の表れとしてとらえたならば、被援助者は、援助者に対して好意的感情をいだく。そして、受けた援助に対して被援助者が高い価値を付与するほど、この好意的感情は互恵的に強まる(Tesser, Gatewood, & Driver, 1968)。さらに、被援助者の援助者に対していただく好意的感情は、援助者に対する互恵的行動を後に生み出す源泉となる(Nemeth, 1970)。

これらの知見が示すように、援助行動研究において、「互恵的」とであるという場合、援助者の愛他的態度、あるいは、援助者と被援助者の双方への好意的感情などが重視されており、「愛他的」や「好意的」などのニュアンスが含まれていると考えられる。

一方、ソーシャル・サポート研究の多くは社会的交換理論に依拠した研究である。よって、基本的に人間は利己的であるとの前提に立ち、人は他者との相互作用から生じる利益を最大化しようと動機づけられていると考える。そして、自分の投入と成果の比率を交換率とし、対人関係において自他の交換率に均衡がとれている状態を「互恵的状态」と定義している。また、自分の交換率が他者のそれを上回っている場合を過剰利得状態とし、逆に、自分の交換率が他者のそれを下回っている

場合を過少利得状態として区別している。すなわち、社会的交換理論においては、対人関係における自他の利得が重視される。つまり、社会的交換理論において「互惠的」であるという場合、二者間における利得の均衡状態が重視され、このニュアンスが含まれていると考えられる。

2. 本論の立場と目的

(1) 相互依存関係

これまで、ある程度持続する親密な対人関係を説明する概念として、「依存」や「愛着」が用いられてきた。しかし、Gurian (1984) や Johnson (1993) は、より現実的な対人関係を説明するという立場から、「相互依存」という概念で対人関係が説明できると主張している。本論では、Gurian や Johnson と同様に、「相互依存」という概念から、より現実的な対人関係の説明を目指す。つまり、相互依存関係を、依存と支援の双方向のやりとりから特徴づけて説明する。

(2) 互惠的相互依存関係

本論が焦点を当てる、ある程度持続する対人関係とは、具体的には、家族関係、恋愛関係、友人関係などである。これらの親密な関係においては、「自分に恩恵を与えてくれた他者に対して、自分も同等の恩恵でお返しをしたい」という、利得の均衡状態を意識する。その一方で、「恩恵を与えてくれた他者には、好意的感情をいだき、そのような相手に対しては、自分が得た恩恵と同等以上の恩恵を与えたい」という、愛他的な態度をいだく場合がある。両者を比べた場合、前者よりも後者の方が、親密な対人関係をより一層特徴づけていると考えられる。それゆえに、本論において「互惠」あるいは「互惠的」であると表現する場合は、愛他的なニュアンスが一層含まれていると考える。

要するに、本論で問題とする「相互依存関係」には、互惠的な動機に基づく依存と支援の双方向のやりとりが含まれることを前提としており、このことを強調するために、親密な対人関係におけ

る相互依存関係を「互惠的相互依存関係」と表現し、これによって対人関係を説明する。

(3) 損得勘定と愛他的な動機から成り立つ対人関係

Clark ら(1979)による「交換的關係」と「共同的關係」の2種類の対人関係と衡平理論との関連性をみると、前述のように、交換的關係は、利得の衡平性を重視する対人関係であり、つまり、衡平理論に基づいて説明できる。しかし、共同的關係は、二者間の利得の割合とは関係なく、他者の満足度を重視する愛他的な対人関係であるので、衡平理論では説明できない。

現実の対人関係を考えてみれば、われわれは、利得の衡平性だけで対人関係を成り立たせているのではない。特に、親密な関係に関しては、利得の衡平性や損得勘定のみが関係を規定しているというよりも、むしろ、それに加えて、愛他的な動機が対人関係を特徴づけていると考えられる。

そこで、本論では、衡平理論に基づく交換的關係に加えて、Clark ら(1979)の共同的關係をも含めた、より現実的な対人関係の説明を目指す。つまり、利己的な損得勘定だけでなく、愛他的な動機に基づく対人関係をも含めた、互惠的相互依存関係から対人関係の説明を試みる。

(4) 互惠的相互依存関係の捉え方

対人関係における依存と支援の双方向のやりとりには、個人と個人の間において依存行動と支援行動がやりとりされる「個人間互惠的相互依存関係」と、個人内において依存欲求と支援欲求とが影響を与え合う、「個人内互惠的相互依存関係」とが考えられる。そして、ある程度持続する対人関係は、個人間での依存と支援の影響過程と個人内での依存と支援の影響過程とが、相互に規定しあいながら展開すると考える。

そこで、本論では、互惠的相互依存関係を2つのレベルでとらえる。第1のレベルは、対人関係を構成する個人と個人、すなわち、個人間での相互依存関係（以後、個人間互惠的相互依存関係と記す）である。第2のレベルは、対人関係を構成

するそれぞれの当事者が、個人内でいづく依存欲求と支援欲求との相互規定性（以後、個人内互恵的相互依存関係と記す）である。

(5) 本論の目的

本論は、ある程度持続する親密な対人関係において、利己的な動機、および、愛他的な動機に基づいて継続的におこなわれる依存と支援の双方向のやりとりから「互恵的相互依存関係」を特徴づけ、これによって、対人関係のあり様をより現実的・文脈的な視点から説明することを目的としている。

そこで本論では、まず、「互恵的相互依存関係」に関わる当事者間で交わされる依存行動と支援行動の双方向の影響過程を説明する「互恵的相互依存関係の個人間過程モデル」を提案する。続いて、「個人間互恵的相互依存関係」の成立要件である個人内における依存欲求と支援欲求の双方向の規定過程を説明する「互恵的相互依存関係の個人内過程モデル」を提案する。

3. 互恵的相互依存関係の個人間過程モデルの提案

(1) 互恵的相互依存関係の個人間過程モデルの概要

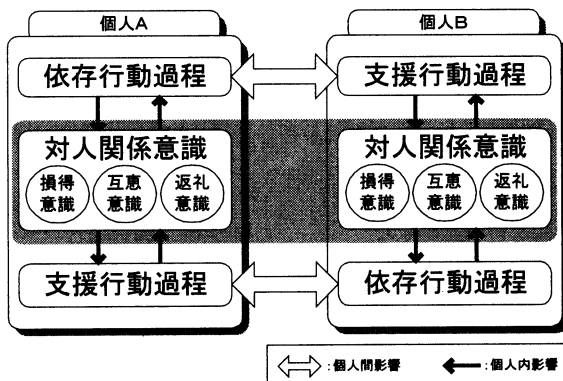


図1 互恵的相互依存関係の個人間過程モデル

互恵的相互依存関係の個人間過程モデル(図1)は、「互恵的相互依存関係」に関わる当事者間で

交わされる依存行動と支援行動の双方向の影響過程をあらわす。つまり、モデルは、互恵的相互依存関係を構成する個人Aと個人Bの間で交わす依存行動と支援行動のやりとりをあらわしており、このやりとりが互恵的な相互依存関係の維持、強化、解消に影響をおよぼす一連の過程を示している。

(2) 個人間影響

モデル図の白い双方向の矢印は、依存行動と支援行動の双方向の影響、つまり、「個人間影響」を示す。モデル図上部の矢印は、個人Aから個人Bへの依存行動と個人Bから個人Aへの支援行動のやりとりを示す。モデル図下部の矢印は、個人Bから個人Aへの依存行動と個人Aから個人Bへの支援行動のやりとりを示す。

他者への依存行動や支援行動では、「どのような内容(道具的、情緒的など)」を「どの程度」、相手に求めるか、あるいは、提供するかが重要な問題となる。すなわち、「内容」とは、依存や支援の「機能」であり、「程度」とは、依存や支援の「強度」である。個人間影響においては、依存者から支援者への依存行動と、支援者から依存者への支援行動とについて、それらの「機能」、および、「強度」の二者間における一致の程度が重要となる。二者間において、一致の程度が釣り合っている場合は、互恵的相互依存関係は維持、強化されるが、釣り合っていない場合は、関係は不安定となり、解消に至る場合もある。

(3) 二者間における対人関係意識の一致性

モデル図中央部に位置し、個人Aと個人Bの対人関係意識にまたがる灰色の部分には、両者の対人関係意識の一致の程度をあらわす。

対人関係意識は、依存行動と支援行動から成り立つ互恵的相互依存関係のあり方に対する個人の態度であり、互恵意識、返礼意識、損得意識の3つの意識から構成される。個人Aと個人Bがそれぞれいづく3つの対人関係意識の様相と、二者間でのそれらの一致の程度が、互恵的相互依存関係の維持、強化、解消に影響をおよぼす。二者間で

一致している場合、互恵的相互依存関係は、維持、強化される。しかし、つり合っていない場合は、関係は不安定になり、解消に至る場合もある。

(4) 個人内影響

個人間における依存行動と支援行動のやりとりは、対人関係を構成する個人にも、それぞれ、「個人内影響」をおよぼす。図1において、個人内の黒い矢印は、依存行動過程、支援行動過程、および、対人意識の間の相互規定的な影響を表している。

援助や被援助の経験が、個人におよぼす影響について、高木(1997)は、援助経験が援助者に与える影響を、援助者における援助経験の影響出現過程モデル(図2)から説明している。それによれば、援助により得た効果と成果の好ましい(あるいは、好ましくない)評価は、自己効力感や有能感、あるいは、自尊心を高揚(低下)させ、これらが、援助に対する肯定的(否定的)な態度と被援助に対する肯定的(否定的)な態度を形成させ、これらが、将来の援助授与、および、援助要請への動機づけを高める(低める)のである。

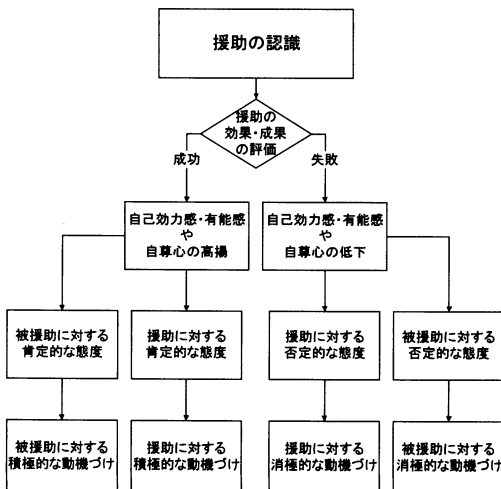


図2 援助者における援助経験の影響出現過程モデル(高木, 1997)

他方、被援助が被援助者におよぼす影響は、被援助者における被援助経験の影響出現過程モデル(図3)から説明している。それによれば、被援助により得た効果と成果の好ましい(あるいは、好ましくない)評価は、援助への感謝、社会的評価の向上、あるいは、自尊心を高揚(低下)させ、これらが、援助に対する肯定的(否定的)な態度と被援助に対する肯定的(否定的)な態度を形成させ、これらが、将来の援助授与、および、援助要請への動機づけを高める(低める)のである。

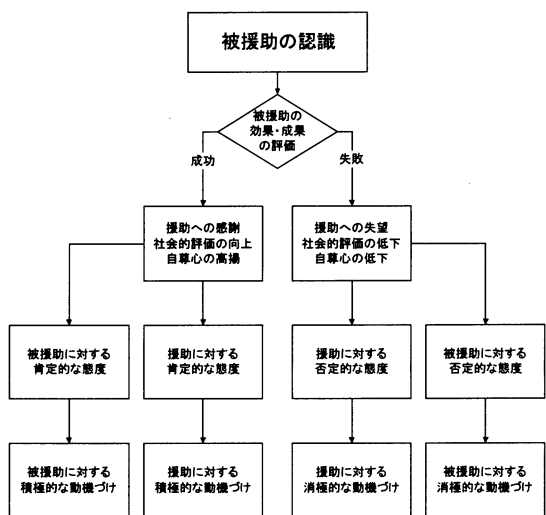


図3 被援助者における被援助経験の影響出現過程モデル(高木, 1997)

すなわち、好ましい援助経験や被援助経験が、援助動機になること、逆に、好ましくない援助経験や被援助経験が、非援助動機になることは、個人内の支援(援助)行動と依存(被援助行動)行動が、相互規定関係にあることを示唆していると考えられる。

(5) 個人間影響と個人内影響の相互作用

個人間で交わされた依存行動と支援行動は、二者それぞれの個人内における依存欲求と支援欲求の関係に影響をおよぼす。さらに、個人内における影響の結果は、二者の依存と支援をそれぞれ特

徴づけ、ふたたび、対人関係のなかで、依存行動と支援行動が影響を交わし合う。依存と支援の関連性を枠組みとして、対人関係とそこにおける個人間影響と個人内影響のダイナミックな相互作用の特徴の解明は、対人関係の理解を一段と進展させると考える。

4. 互恵的相互依存関係の個人内過程モデルの提案

対人関係を構成する基礎が個人にあると考えれば、個人内互恵的相互依存関係は、個人間互恵的相互依存関係の成立要件と考えられる。つまり、個人内互恵的相互依存関係の詳細な解明が、個人間互恵的相互依存関係の解明の前提と考える。本節からは、個人内影響についての詳細な説明を行う。

(1) 互恵的相互依存関係の個人内過程モデルの概要：依存行動過程と支援行動過程、および、対人関係意識

この項では、「互恵的相互依存関係の個人内過程モデル」(図4)の概要について説明する。このモデルは、ある個人が行う依存行動の過程と支援行動の過程、そして、それらの行動の経験から形成される対人関係意識の3つの部分から構成される。

まず、依存行動過程は、ある個人による依存行動が生起する過程を説明する。それは、モデル図の上部に相当し、依存欲求、依存行動、依存行動評価過程、そして、依存行動評価の結果としての依存の満足・不満足、心理的負債感までの一連の過程からなる。

つぎに、支援行動過程は、ある個人による支援行動が生起する過程を説明する。それは、モデル図の下部に相当し、支援欲求、支援行動、支援行動評価過程、そして、支援行動評価の結果としての支援の満足・不満足、心理的負担感までの一連の過程からなる。

最後に、対人関係意識は、依存行動と支援行動を通じて形成する対人関係のあり方に対する個人

の態度である。それは、モデル図の中央部に位置し、互恵意識、返礼意識、損得意識の3つの意識からなる。これらの意識は、依存行動過程と支援行動過程にそれぞれ影響を与える(図の灰色の部分)。また、対人関係意識は、依存行動過程における依存行動評価の結果、および、支援行動過程における支援行動評価の結果からそれぞれ影響を受ける。そして、対人関係意識は、対人関係のあり方に対する態度であるので、依存欲求と支援欲求の程度にも影響を与える。

このように、対人関係意識と依存行動過程、および、支援行動過程の3つの部分は、相互規定的な関係にある。

(2) 依存行動過程

依存行動過程(図5)は、依存欲求、依存行動、依存行動評価、依存行動評価結果に基づく依存の満足・不満足、心理的負債感までの一連の過程で構成されている。

1) 依存行動の生起過程：依存欲求から依存行動まで

依存行動の生起過程は、「他者からの道具的な支援、あるいは、精神的な支援を求める欲求」と定義される依存欲求の存在から始まる。依存欲求が高まれば、依存行動の様式の望ましさや依存行動が支援者に受容される見込みについて検討する過程に進む。依存行動様式の望ましさの判断には、依存行動に関する過去の経験を通して内在化された個人的規範、依存者と支援者の二者関係における集団規範、および、社会的規範などが影響をおよぼす。また、依存行動が受容される見込みの判断には、行動様式の望ましさの程度、過去の依存行動受容の経験、依存者と支援者の関係などが影響をおよぼす。依存行動様式が望ましく、また、受容される見込みが高いと判断されれば、依存行動が実行される。しかし、行動様式の望ましさや受容の見込みが低い場合には、依存行動の様式の再検討がおこなわれる。再検討の結果、適当な依存行動様式が見つからなければ、あるいは、依存受容の見込みがたたなければ、「依存できない」

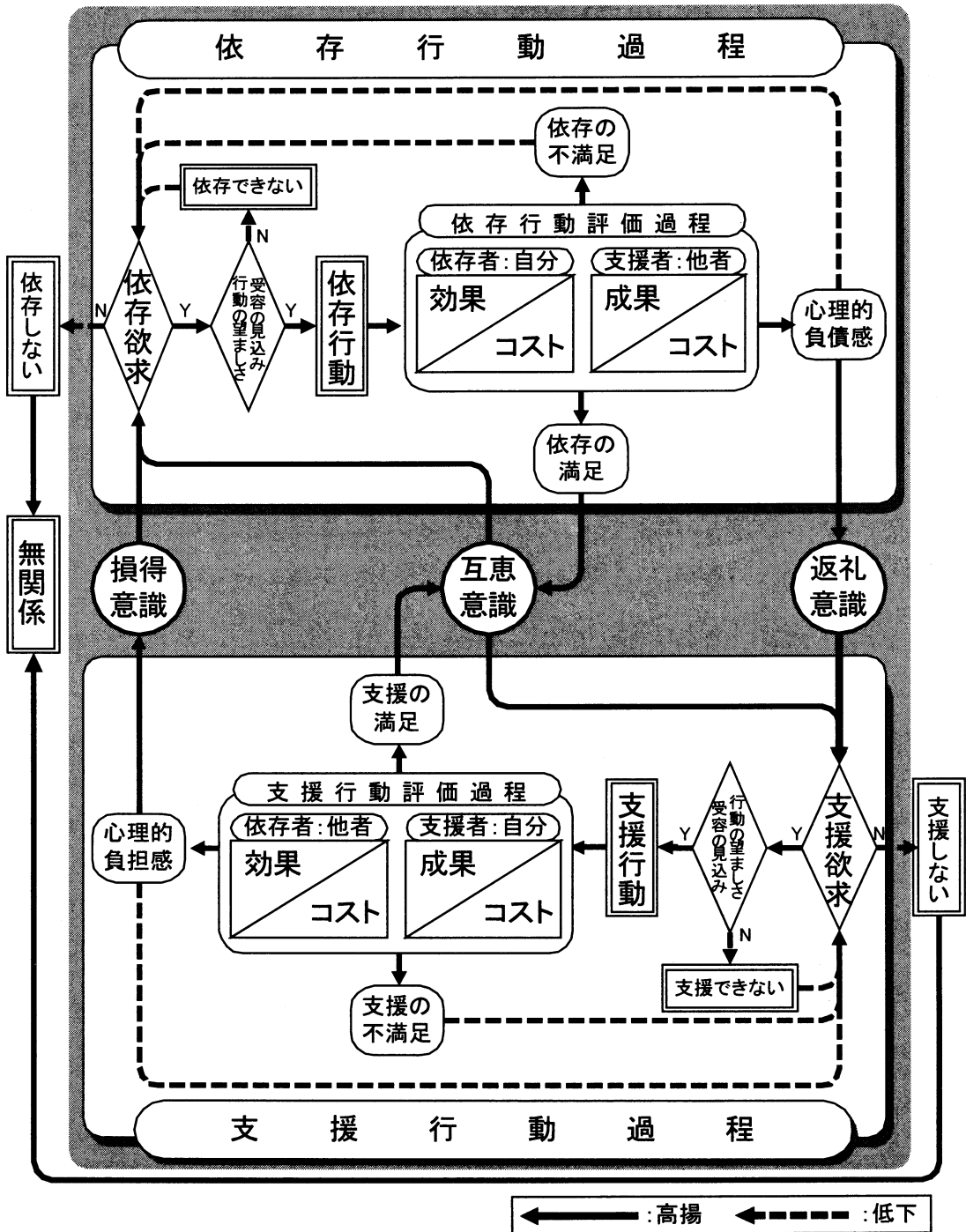


図4 互恵的相互依存関係の個人内過程モデル

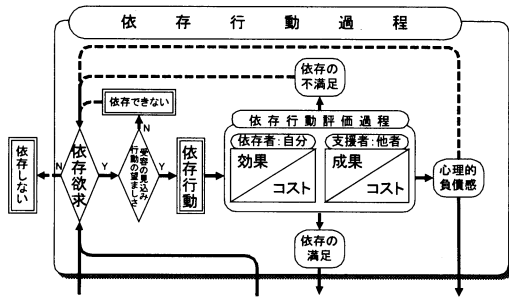


図5 依存行動過程

状態となり、依存欲求を低下させることとなる。依存行動が生起しない程度まで依存欲求が低下すれば、「依存しない」状態になる。

2) 依存行動評価過程

依存行動がおこなわれれば、その行動について評価する過程に進む。依存行動の評価は、依存者においては「依存者が得た依存効果」と「依存者が被った(依存)コスト」について、および、支援者においては「支援者が得た支援成果」と「支援者が被った(支援)コスト」についておこなわれる。なお、「依存者が得た依存効果」とは、依存者が依存行動から得た恩恵であり、例えば、道具的な支援による問題の解決、あるいは、精神的な支援による情緒的な安定などである。また、「依存者が被った(依存)コスト」とは、依存者が依存行動にともなって覚悟しなければならない犠牲や損失であり、例えば、依存することによる自尊心の低下、自分の能力のなさを他者に知られること、および、自分の劣った側面を他者にさらけ出すことによる魅力の低下などである。他方、「支援者が得た支援成果」とは、支援者が支援行動から得たと依存者が推察した恩恵であり、例えば、支援行動による支援者自身の自尊心の維持や向上、支援行動から得たポジティブな感情や経験、依存者と支援者の関係の維持・強化、依存者の幸福の認知などである。ところで、「依存者が得た依存効果」と「支援者が得た支援成果」は、高木(1998)の「援助されることによって、被援助者の問題が解決する『援助効果』」と「他者を援助することによって、援助者自身も恩恵を受ける『援

助成果』」にそれぞれ相当する。最後に、「支援者が被ったコスト」とは、支援するために支援者が被ったと依存者が推察した犠牲や損失であり、例えば、時間、金銭、労力の浪費などである。

3) 依存行動の評価結果：依存の満足・不満足と心理的負債感

依存行動評価過程における依存行動の評価結果は、依存の満足・不満足と心理的負債感を規定する。

まず、依存の満足度は、依存者においては「依存者が得た依存効果」が大きいほど、そして、「依存者が被った(依存)コスト」が小さいほど、さらに、支援者においては「支援者が得た支援成果」が大きいほど、そして、「支援者が被ったコスト」が小さいほど、高くなる。依存に満足であれば、依存行動と支援行動とから成り立つ互恵的な対人関係に対してポジティブな態度である互恵意識が高まる。また、満足は快な状態であるため、今後も満足を経験するようになると、依存欲求は高まる。

一方、依存の不満足度は、依存者においては「依存者が得た依存効果」が小さいほど、そして、「依存者が被った(依存)コスト」が大きいほど、さらに、支援者においては「支援者が得た支援成果」が小さいほど、そして、「支援者が被ったコスト」が大きいほど、高くなる。不満足は不快な状態であるため、今後は不満足を経験しないようになると、依存欲求は低まる。

さて、心理的負債感(Greenberg, 1980)は、他者から援助(支援)されることが一種の負債を負った状態を生みだし、それが不快感情の源泉となることで、他者への返礼が義務づけられる心理状態を意味する。心理的負債感は、依存者においては「依存者が得た依存効果」が大きいほど、「依存者が被った(依存)コスト」が小さいほど、さらに、支援者においては「支援者が得た支援成果」が小さいほど、そして、「支援者が被ったコスト」が大きいほど、強くなる。すなわち、依存者が社会的交換理論の衡平理論における過剰利得状態となり、「申しわけない」「心苦しい」など、一種の負債を負った状態の心理的負債感を感じるのである。

Greenberg(1980)は、援助(依存)効果と援助(支援)コストとを比較して、前者が後者以上に心理的負債感の程度に影響をおよぼすとしている。しかし、相川(1988)は、成功した援助(支援)では援助(支援)コストが、また、失敗した援助(支援)では、援助(依存)効果がより強く心理的負債感の程度を規定すると指摘している。

この心理的負債感は、2つの方向へ影響をおよぼす。第1は、負債感を低減すべきであるという返礼意識が高まり、返礼行動として、相手への支援提供を望み、すなわち、支援欲求を高めるのである。第2は、将来不快な心理的負債感をできるだけ経験しないようにと、依存欲求を低めるのである。

(3) 支援行動過程

支援行動過程(図6)は、支援欲求、支援行動、支援行動評価過程、支援行動評価の結果としての支援の満足・不満足、心理的負担感までの一連の過程である。

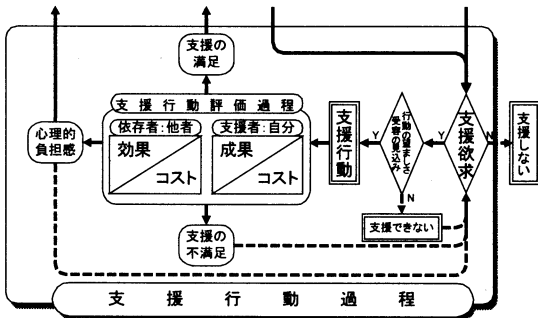


図6 支援行動過程

1) 支援行動の生起過程：支援欲求から支援行動まで

支援行動の生起過程は、「他者への道具的な支援、あるいは、精神的な支援を提供することを望む欲求」と定義される支援欲求の存在から始まる。

支援欲求が高まれば、支援行動様式の望ましさや支援行動が依存者に受容される見込みについて検討する過程に進む。支援行動様式の望ましさの判断には、支援行動に関する過去の経験を通して

内在化された個人的規範、支援者と依存者の二者関係における集団規範、および、社会的規範などが影響をおよぼす。また、支援行動が受容される見込みの判断には、行動様式の望ましさの程度、過去の支援行動受容の経験、支援者と依存者の関係などが影響をおよぼす。支援行動様式が望ましく、また、受容される見込みが高いと判断されれば、支援行動が実行される。しかし、行動様式の望ましさや受容の見込みが低い場合は、支援行動の様式の再検討がおこなわれる。再検討の結果、適当な支援行動様式が見つからなければ、あるいは、支援受容の見込みがたたなければ、「支援できない」状態となり、支援欲求が低下することとなる。支援行動が生起しない程度まで支援欲求が低下すれば、「支援しない」状態となる。

2) 支援行動評価過程

支援行動がおこなわれれば、その行動について評価する過程に進む。支援行動の評価は、依存者においては「依存者が得た依存効果」と「依存者が被った(依存)コスト」について、および、支援者においては「支援者が得た支援成果」と「支援者が被った(支援)コスト」についておこなわれる。なお、「依存者が得た依存効果」とは、依存者が(支援者が提供した)支援行動から得たと支援者が推察する恩恵であり、例えば、道具的な支援による問題の解決、あるいは、精神的な支援による情緒的な安定などである。また、「依存者が被った(依存)コスト」とは、依存者が(支援者が提供した)支援行動によって被ったと支援者が推察する犠牲や損失であり、例えば、依存することによる恥ずかしさや自尊心の低下、あるいは、学習や努力の機会の損失などである。他方、「支援者が得た支援成果」とは、支援者が支援行動から得た恩恵であり、例えば、支援行動による支援者自身の自尊心の維持や向上、支援行動から得たポジティブな感情や経験、支援者と依存者の関係の維持・強化、支援者が認知する依存者の幸福などである。最後に、「支援者が被ったコスト」とは、支援するために支援者が被った犠牲や損失であり、例えば、時間、金銭、労力の浪費などである。

3) 支援行動の評価結果：支援の満足・不満足と心理的負担感

支援行動評価過程における支援行動の評価結果は、支援の満足・不満足と心理的負担感を規定する。

まず、支援の満足度は、依存者においては「依存者が得た依存効果」が大きいほど、そして、「依存者が被った（依存）コスト」が小さいほど、さらに、支援者においては「支援者が得た支援成果」が大きいほど、そして、「支援者が被った（支援）コスト」が小さいほど、高くなる。支援に満足であればあるほど、依存行動と支援行動とから成り立つ互恵的な対人関係に対してポジティブな態度である互恵意識が高まる。満足は快な状態であるため、今後も満足を経験するようにと、支援欲求は高まる。

一方、支援の不満足度は、依存者においては「依存者が得た依存効果」が小さいほど、そして、「依存者が被った（依存）コスト」が大きいほど、さらに、支援者においては「支援者が得た支援成果」が小さいほど、そして、「支援者が被った（支援）コスト」が大きいほど、高くなる。不満足は不快な状態であるため、今後は不満足を経験しないようにと、支援欲求は低まる。

さて、心理的負担感は、他者を援助（支援）することが一種の負担な状態を生みだし、それが不快感情の源泉となることで、他者からの返礼を希求する心理状態を意味する。支援者がいただく心理的負担感は、依存者においては「依存者が得た依存効果」が大きいほど、そして、「依存者が被った（依存）コスト」が小さいほど、さらに、「支援者が得た支援成果」が小さいほど、また、「支援者が被ったコスト」が大きいほど、強くなる。すなわち、支援者が衡平理論における過少利得状態となり、「割に合わない」「重荷に感じる」「一人だけ得をして、ずるい」など、一種の負担を負った状態の心理的負担感を感じるのである。

この心理的負担感は、2つの方向で影響をおよぼす。第1は、「他者に支援を与えたなら、自分が被ったコストや他者が得た恩恵に見合うだけのお礼を受けるべきだ」という損得意識が高まり、

利得の均衡状態を求める動機づけから、依存者に返礼行動として支援提供を求める、すなわち、依存欲求が高まるのである。第2は、将来の心理的負担感をできるだけ経験しないようにと、支援欲求を低下させるのである。

(4) 対人関係意識

対人関係意識は、依存行動と支援行動の相互関係のあり方に対する個人の態度であり、互恵意識、返礼意識、損得意識の3つの意識がある。この対人関係意識は、それらの基盤となる依存欲求や支援欲求の程度、および、依存行動評価や支援行動評価を規定する。これとは逆に、依存行動評価の結果や支援行動評価の結果は、対人関係意識を規定する。すなわち、対人関係意識と依存行動過程、および、支援行動過程は、相互規定的な関係にある。

1) 互恵意識

互恵意識とは、依存行動と支援行動とから成り立つ互恵的な対人関係に対するポジティブな態度である。つまり、「依存者が得た効果と支援者が得た成果に対して、感謝や満足の気持ち、そして、相手への好意的感情をいただき、依存して、あるいは、支援してよかった」、また、「互いに支え合う対人関係は望ましい」という気持ちから、互恵的な行動を動機づける態度である。

2) 返礼意識

返礼意識とは、依存行動において、衡平理論の「過剰利得状態」を強く意識する態度である。つまり、自分が依存によって受けた大きな恩恵と相手がそのために被った大きなコストや負担の点から心理的負債感をいただき、相手に申しわけなく思い、相手にお礼をする気持ちから、「他者から支援を受けた場合、自分が得た恩恵や他者が被ったコストに見合うだけのお礼をすべきだ」という考えから返礼行動を動機づける態度である。

3) 損得意識

損得意識とは、支援行動において、衡平理論の「過少利得状態」を強く意識する態度である。つまり、自分が支援のために被った大きなコストや負担と相手がそのために得た大きな恩恵の点から

心理的負担感をいだし、自分は割に合わないと思ひ、相手に償いを求める気持ちから、「他者に支援を与えた場合、そのために自分が被ったコストと他者が得た恩恵に見合うだけのお礼を求めて然るべきだ」という考えから返済行動を動機づける態度である。

5. 互恵的相互依存関係の個人内過程モデルにおける対人関係意識を通じた依存欲求と支援欲求の高揚・低下

本節では、互恵的相互依存関係の個人内過程モデルによって、個人内において依存行動と支援行動の双方向から対人関係意識に影響がおよび、その結果、依存欲求と支援欲求が高揚、あるいは、低下する過程を説明する(図7)。

依存欲求と支援欲求の高揚は、依存行動と支援行動の評価や結果に基づいて相互規定的に変容した対人関係意識の高揚の影響を受けて起こる。この依存欲求や支援欲求の高揚を説明するルートは、モデル図において実線の矢印で示されている。

依存欲求を高揚させるルートは3つある。1つめは、①依存行動の評価からの「依存の満足」が「互恵意識」を高揚させ、②この高揚した「互恵意識」が依存欲求を高揚させるルートである。2つめは、③支援行動の評価からの「支援の満足」が「互恵意識」を高揚させ、②この高揚した「互恵意識」が依存欲求を高揚させるルートである。3つめは、⑤支援行動の評価からの「心理的負担感」が「損得意識」を高揚させ、⑥この高揚した「損得意識」が依存欲求を高揚させるルートである。

支援欲求を高揚させるルートも3つある。1つめは、③支援行動の評価からの「支援の満足」が「互恵意識」を高揚させ、④この高揚した「互恵意識」が支援欲求を高揚させるルートである。2つめは、①依存行動の評価からの「依存の満足」が「互恵意識」を高揚させ、④この高揚した「互恵意識」が支援欲求を高揚させるルートである。3つめは、⑦依存行動の評価からの「心理的負担感」が「返礼意識」を高揚させ、⑧この高揚した

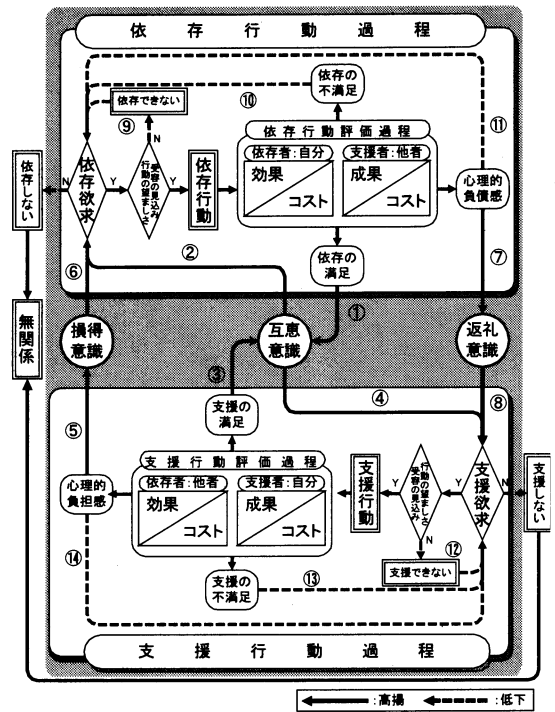


図7 互恵的相互依存関係の個人内過程モデルにおける対人関係意識を通じた依存欲求と支援欲求の高揚・低下

「返礼意識」が支援欲求を高揚させるルートである。

他方、依存欲求や支援欲求の低下は、依存行動と支援行動の評価や結果に基づいて相互規定的に変容した対人関係意識の低下の影響を受けて起こる。依存欲求や支援欲求の低下を説明するルートは、モデル図において破線の矢印で示されている。

依存欲求を低下させるルートは3つある。1つめは、依存行動の望ましさと依存受容の見込みの検討の結果、⑨「依存できない」との判断が依存欲求を低下させるルートである。2つめは、⑩依存行動の評価からの「依存の不満足」が依存欲求を低下させるルートである。3つめは、⑩依存行動の評価からの「心理的負担感」が依存欲求を低下させるルートである。

支援欲求を低下させるルートも3つある。1つめは、⑫支援行動の望ましさと支援受容の見込み

の検討の結果、「支援できない」との判断が支援欲求を低下させるルートである。2つめは、⑬支援行動の評価からの「支援の不満足」が支援欲求を低下させるルートである。3つめは、⑭支援行動の評価からの「心理的負担感」が支援欲求を低下させるルートである。

(1) 個人内互恵的相互依存関係における互恵意識ループ、返礼意識ループ、および、損得意識ループ

Clark & Mills(1979) は、二者の交換を支配する規則、あるいは、規範に基づき、対人関係を共同の関係と交換的関係の2つのタイプに分けて説明している。まず、共同の関係では、利得が相手の欲求に応じて与えられ、特定の見返りを期待せずに相手を満足させるために与えられる。すなわち、共同の関係においては、お互いの利得の均衡状態は問題にならず、利得を受ける相手の満足が重要になる。他方、交換的関係では、過剰利得状態、つまり、過去に受け取った何らかの利得によって生じた借りを返すため、あるいは、過少利得状態、つまり、将来に特定のお返しを受け取ることを期待して、利得が供与される。すなわち、交換的関係においては、二者間における利得の均衡状態が重要になる。

なお、個人が、共同の関係と交換的関係をどの程度志向するかについての個人差変数である共同の関係志向性と交換的関係志向性(Clarkら, 1987)は、相互独立であることが明らかにされている(諸井, 1993)。

互恵的相互依存関係の個人内過程モデルにおける対人関係意識の高揚・低下を、Clarkらの共同の関係と交換的関係に関連づけてみると、まず、互恵意識は、互恵的な行動を動機づける態度であり、利得を受ける双方の満足が重要であることから、共同の関係に関係すると考えられる。一方、返礼意識は、衡平理論における過剰利得状態を強く意識する態度であり、また、損得意識は、過少利得状態を強く意識する態度であり、いずれも利得の均衡が重要であることから、交換的関係に関係すると考えられる。

視点を変えて、Clarkらの対人関係タイプを互恵的相互依存関係に適用するならば、共同の関係は、互恵的相互依存関係の個人内過程モデルにおける互恵意識ループに基づく互恵的相互依存関係として、交換的関係は、返礼意識ループに基づく互恵的相互依存関係、あるいは、損得意識ループに基づく互恵的相互依存関係として、それぞれを説明することができる。

1) 共同的な互恵的相互依存関係を形成する互恵意識ループ

a. 互恵意識ループ

共同的な互恵的依存関係は、互恵意識ループに基づいて形成される。互恵意識ループ(図8)は、依存の満足、あるいは、支援の満足から、互恵意識を経由して、依存欲求と支援欲求が高められ、対人関係の維持、強化に資する依存行動や支援行動につながる過程を示している。すなわち、①依存の満足、および、②支援の満足は、互恵意識を

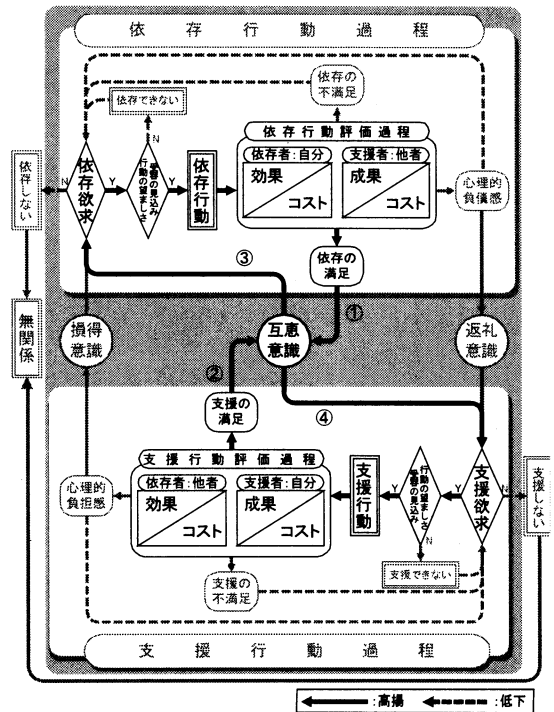


図8 互恵的相互依存関係の個人内過程モデルにおける互恵意識ループ

高揚させる。③互恵意識は、「お互いに支え合う対人関係は望ましい」という互恵的相互依存関係をポジティブに評価する態度であり、「互恵的関係にある他者には、好意的感情をいだき、そのような相手に対しては、支援（恩恵）を求めたい」という考えから依存欲求が高められる。他方、④互恵意識は、「互恵的関係にある他者には、好意的感情をいだき、そのような相手に対しては、支援（恩恵）を与えたい」という考えから支援欲求が高められる。依存欲求と支援欲求の高揚は、依存行動と支援行動を動機づけ、依存と支援とから成り立つ互恵的相互依存関係の形成へとつながるのである。

2) 交換的な互恵的相互依存関係を形成する返礼意識ループと損得意識ループ

互恵的相互依存関係の形成において、衡平理論における自他の利得の均衡状態がもたらす内的な展開を推定してみる。まず、過剰利得状態から生起する心理的負債感を強く意識すると返礼意識が喚起され、それともなって支援欲求が高まり、支援行動を通じて個人内で均衡状態を回復しようと動機づけられる。あるいは、過少利得状態から生起する心理的負担感を強く意識すると損得意識が喚起され、それともなって依存欲求が高まり、依存行動を通じて個人内で均衡状態を回復しようと動機づけられる。以上のことから、交換的な互恵的相互依存関係は、過剰利得状態における返礼意識ループ（図9）と過少利得状態における損得意識ループ（図10）から説明できる。

a 返礼意識ループ

返礼意識ループ（図9）は、過剰利得状態における交換的な互恵的相互依存関係の形成を説明する。

依存行動の結果、自分が得た依存効果が依存コストよりも大きい、あるいは、相手の支援コストが支援成果よりも大きい場合、心理的負債感が生起し、①「他者から支援を受けたなら、自分が得た恩恵や他者が被ったコストに見合うだけのお礼をすべきである」という返礼意識が高まる。そして、②支援を受けたことに対するお返しとして、支援の提供を望む支援欲求が高揚し、返礼として

の支援行動が動機づけられる。これにともなう支援行動の様式が望ましく、また、支援が受容されるとの見込みが高いと判断されれば、支援行動が実行される。この場合、この返礼としての支援行動が心理的負債感を解消するのに十分な効果を上げたと評価されるとき、支援者はその支援に満足する。

しかしながら、支援行動が心理的負債感を解消するのに十分な効果を上げたと評価されないとき、支援者はその支援に満足せず、③支援欲求は低められる。しかし、負債感解消への動機づけが高い場合（①②）には、支援行動が負債感を解消するのに十分な効果を上げるまで、支援行動を繰り返す。以上の交換的な返礼意識ループを通じて支援行動に満足すると、④互恵意識が高められ、以後の行動に結びつく⑤支援欲求と⑥依存欲求が高揚され、互恵的な動機からのさらなる依存行動と支援行動へとつながり、これが、互恵的相互依存関係を形成する（④⑤⑥⑦）。

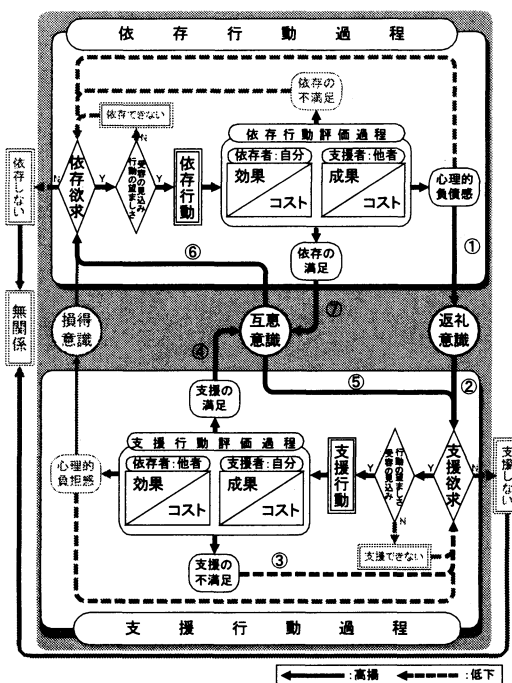


図9 互恵的相互依存関係の個人内過程モデルにおける返礼意識ループ

b 損得意識ループ

損得意識ループ (図10) は、過少利得状態における交換的な互恵的相互依存関係の形成を説明する。

支援行動の結果、支援者が被った支援コストが支援成果より大きく、また、依存者が得た依存効果が依存コストより大きい場合、心理的負担感が生起し、①「他者に支援を与えたなら、自分が被ったコストや他者が得た恩恵に見合うだけのお礼を受けるべきだ」という損得意識が高まる。そして、②支援において被った支援コストの大きさや、相手が得た依存効果に見合うだけの恩恵を相手に求める依存欲求が高揚し、賠償としての依存行動が動機づけられる。これにともなう依存行動の様式が望ましく、また、依存が受容されるとの見込みが高いと判断されれば、依存行動が実行される。この場合、この賠償としての依存行動が心理的負担感を解消するのに十分な効果を上げたと評価されるとき、依存者はその依存に満足する。

しかしながら、依存行動が心理的負担感を解消するのに十分な効果を上げたとは評価されないとき、依存者はその依存に満足せず、③依存欲求は低められる。しかし、負担感解消への動機づけが高い場合 (①②) には、依存行動が負担感を解消するのに十分な効果を上げるまで、依存行動を繰り返す。

以上の交換的な損得意識ループを通じて依存行動に満足すると、④互恵意識が高められ、以後の行動に結びつく⑤依存欲求と⑥支援欲求が高揚され、互恵的な動機からのさらなる依存行動と支援行動へとつながり、これが、互恵的相互依存関係を形成する (④⑤⑥⑦)。

6. 現実的・文脈的な視点からの互恵的相互依存関係の説明

(1) 援助者の反応過程モデル (西川, 1998) と返礼意識ループ

これまでの援助行動研究では、衡平理論により、被援助者の過剰利得状態が心理的負債感を喚起させ、返礼行動を引き起こす (Greenberg & Frisch, 1972; 相川, 1988; 西川, 1985; 1986など)、あるいは、援助の要請を抑制する (島田・高木, 1994; 高木, 1997など) ことに関心をよせてきた。

西川(1998)は、“私たちは、日常、他者から助けられたとき、「ありがとう」と援助者に感謝するとともに、「すみません」と詫げる。このような被援助者の反応は、返礼行動が互恵的か、さもなくば補償的かと、二者択一的に単純に類型化されるものでない (p.128)”と述べている。

そして、西川は、被援助者が援助者に対して行う返礼行動を、援助コストの大きさが「補償的返礼行動」を導く過程と、援助のやりとりのなかに含まれる被援助報酬の大きさが「互恵的返礼行動」を導く過程の双方を同時に視野に入れた被援助者の反応過程モデル (図11) から説明している。

ここで、返礼意識ループにおいて支援欲求が高められるルート (図12) に注目してみると、まず、依存行動評価の結果、心理的負債感の高まりが返礼意識を高揚させ、返礼の動機から支援欲求が高

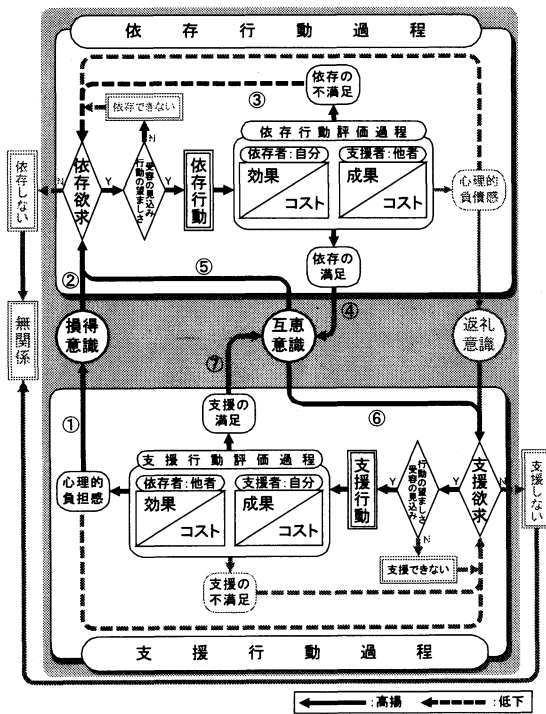


図10 互恵的相互依存関係の個人内過程モデルにおける損得意識ループ

まる「返礼的支援ルート」と、そして、依存行動評価における依存の満足の結果、互恵意識が高められ、互恵的、愛他的な動機から支援欲求が高まる「互恵的支援ルート」の2つのルートとが併存している。

西川の被援助者の反応過程モデルと返礼意識ループを対応づけてみれば、「補償的返礼行動」は、返礼意識ループにおける「返礼的支援ルート」に、また、「互恵的返礼行動」は、依存の満足から支援欲求へ至る「互恵的支援ルート」に、それぞれ相当する過程であると考えられる。

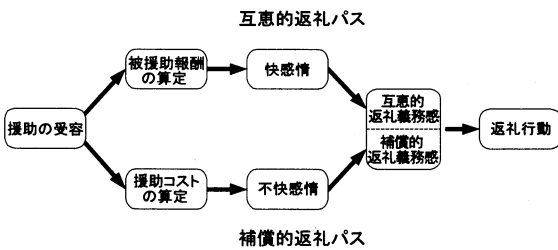


図11 被援助者の反応過程モデル (西川, 1998)

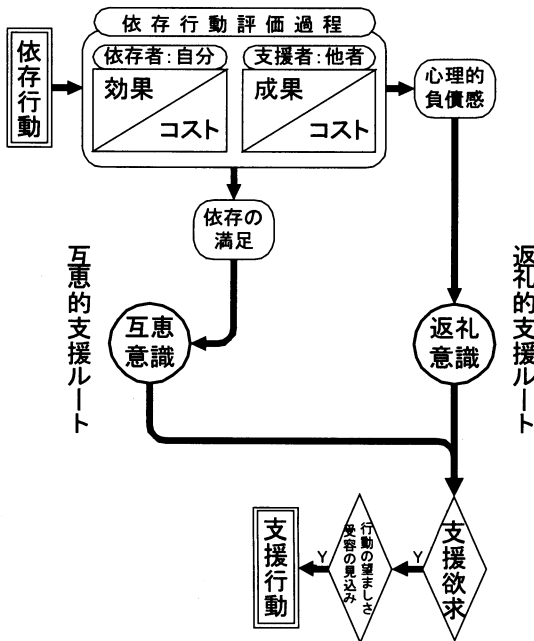


図12 返礼意識ループにおける互恵的支援ルートと返礼的支援ルート

(2) 利己的相互依存関係を形成する損得意識ループ

Stierlin (1959) は、対人関係の臨床的な特徴を論じるうえで、生物学の「共生(symbiosis)」に類似する概念として「相互依存」を用い、さらに、「相互依存」を、「共利共生(mutualism)」、「片利共生(commensalisms)」、および、「寄生(parasitism)」に分けている。「共利共生」とは、異なった種が互いに利益を与えながら共存することであり、互恵的相互依存関係に相当する。「片利共生」とは、一方のみが他方から利益を得ながら共生することである。また、「寄生」とは、一方が他方に悪影響を与えながら利益を得て共生することである(藤田, 1997)。このうち、「片利共生」は、利己的な動機から他者を支援するような「利己的相互依存関係」に相当する。具体的には、自分をかわいがって欲しい、あるいは、他者からの支援や保護を得たいなど、相手から恩恵を得るために、戦略的に、他者を支援する場合の相互依存関係である。

利己的相互依存関係の形成は、図13の利己的相互依存関係の個人内過程モデルにおける損得意識ループから説明できる。利己的相互依存関係の形成を説明する損得意識ループの中核的概念は「他者に支援を与えたなら、自分が被ったコストや他者が得た恩恵に見合うだけのお礼を受けるべきだ」という損得意識である。

支援行動の結果、支援者が被った支援コストが支援成果より大きく、また、依存者が得た依存効果が依存コストより大きい場合、心理的負担感が生起し、①損得意識が高まる。そして、②自分が被った支援コストの大きさや、相手が得た依存効果に見合うだけの恩恵を相手に求める依存欲求が高揚し、賠償としての依存行動が動機づけられる。これともなう依存行動の様式が望ましく、また、依存が受容されるとの見込みが高いと判断されれば、依存行動が実行される。利己的相互依存関係における依存行動では、相手から如何に多くの支援(恩恵)を得られるかが重要となる。この場合、過去の支援(input)が、満足できるだけの依存行動による恩恵(output)を引き出したと評価される

とき、依存者は依存に満足する。利己的な依存の満足は、③損得意識を高める。さらなる損得意識の高揚は、②相手への依存欲求をさらに高める。そして、依存欲求を満たす（相手からの支援を引き出す）ための利己的な動機から、④支援欲求が高められる。

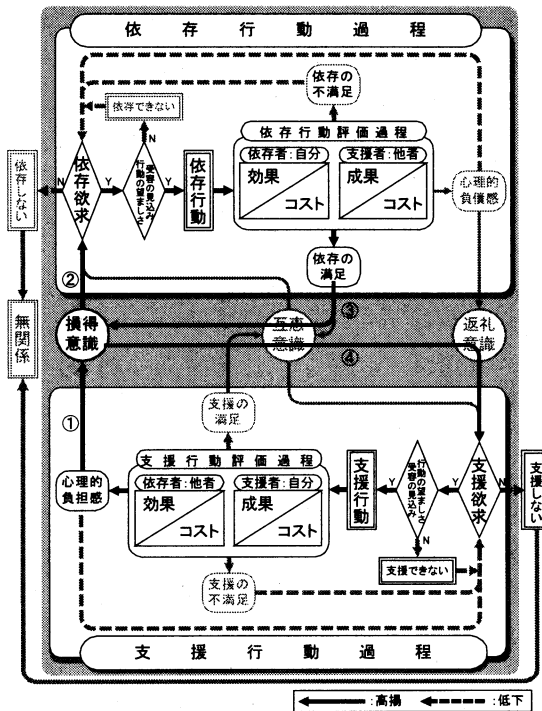


図13 利己的相互依存関係の個人内過程モデルにおける損得意識ループ

相手に賠償としての支援提供を動機づけるためには、支援行動において、より大きな心理的負担感を相手に感じさせる必要がある。そのためには、支援者は、大きな支援コストを被るか、あるいは、依存者に大きな恩恵を与えなければならない。結果として、支援提供における心理的負担感が増大し、また、二者間での利得の均衡状態は不均衡となる。

このような利己的相互依存関係においては、関係を構成する二者が、共に関係から満足感を得ることは難しく、常に二者は、自他の利得の不均衡を意識する不快な状態にある。関係を構成する二者が、共に関係から満足感を得られる互恵的相互

依存関係を形成するためには、損得意識が規定する損得意識ループから脱し、互恵意識が規定する返礼意識ループ、あるいは、互恵意識ループへと移行することが望ましいのである。

7. 総括と今後の展望

本節では、本論の総括として、今後の展望について述べる。互恵的相互依存関係の形成を説明する互恵的相互依存関係の個人間過程モデルと個人内過程モデルは、過去の援助行動研究やソーシャル・サポート研究の知見に基づき提案された。モデル構築の基となった研究には実証的研究も含まれていたが、思弁的に構築されたモデルであるため、実証的検討が必要である。次項では、個人間過程モデルと個人内過程モデルについて、今後検討されるべき課題を、それぞれ詳しく述べる。

(1) 個人間過程モデルの実証的検討

本論で提案した互恵的相互依存関係の個人間過程モデルは、前述のように、思弁的に構築されたものである。今後は、モデルの精緻化と、その理論的妥当性の検討を行う必要がある。これらの検討を通じて、互恵的相互依存関係を鍵概念とする対人関係の理解が一段と進展すると考えられる。そのためには、個人間過程モデルの実証的検討を、以下の2点から行う必要がある。

- ①ダイアド・データ（二者による双方向的データ）による実証的検討
- ②依存と支援の「機能」、「強度」、および、「対人関係意識」の二者間での一致の程度に関する実証的検討

まず、①ダイアド・データ（二者による双方向的データ）による実証的検討については、個人間互恵的相互依存関係は、関係を構成する二者から成り立つため、ダイアド・データによる双方向的な人間関係の検討が必要である。今後は、ダイアド・データによる、互恵的相互依存関係の個人間過程モデルの精緻化と、その理論的妥当性の検討

を行う必要がある。

つぎに、②依存と支援の「機能」、および、「強度」の、二者間での一致の程度に関する実証的検討について、依存行動や支援行動では、「どのような内容(道具的、情緒的など)」を「どの程度」、相手に求めるか、あるいは、提供するかが重要な問題となる。「内容」とは、依存や支援の「機能」であり、「程度」とは、依存や支援の「強度」である。本論では、3. 互惠的相互依存関係の個人間過程モデルの提案の(2)個人間影響で、「依存と支援のやりとりにおいて、「機能」、および、「強度」の二者間における一致の程度が、つり合っている場合は、互惠的相互依存関係は維持、強化されるが、つり合っていない場合は、関係は不安定となり、解消に至る場合もある。」と述べた。これは、Adams(1963, 1965)の衡平理論を基にしている。つまり、不衡平状態は、当該の人物に、不衡平の程度に応じて緊張を生じさせ、その緊張は不衡平の低減を動機づける。そして、不衡平の低減は、①自他の出費と利得への現実的、あるいは、認知的変化、②不衡平が生じている場からの逃避、および、③比較他者の変更、によって実現できるのである。また、本論の3. 互惠的相互依存関係の個人間過程モデルの提案の(3)二者間における対人関係意識の一致性において、「個人Aと個人Bがそれぞれいざく3つの対人関係意識の様相と、二者間でのそれらの一致の程度は、互惠的相互依存関係の維持、強化、解消に影響をおよぼす。対人関係意識が、二者間で一致している場合、互惠的相互依存関係は、維持、強化される。しかし、つり合っていない場合は、関係は不安定になり、解消に至る場合もある。」と述べた。これは、態度の類似性が対人魅力を高めるという類似性-魅力理論(Byrne & Nelson, 1965)を基にしている。なお、類似性-魅力理論は、類似性が相手の行動の予測におけるコストを低減するという社会的交換理論の立場からも説明される。このように思弁的に構築された互惠的相互依存関係における、個人間での依存と支援の「機能」、「強度」、および、「対人関係意識」の二者間での一致の程度に関して、それぞれの一致が、互惠的

相互依存関係にどのように影響を与えるのかについて実証的検討を行うことにより、互惠的相互依存関係から、対人関係、および、ダイナミックな相互作用の様態を解明することとなり、対人関係の理解が一段と進展すると考える。

(2) 個人内過程モデルの実証的検討

互惠的相互依存関係の個人内過程モデルの実証的検討は、以下の3点から行う必要がある。

- ①依存欲求尺度と支援欲求尺度の再検討
- ②対人関係意識についての実証的検討
- ③互惠的相互依存関係を説明する影響過程パターンの実証的検討

まず、①依存欲求尺度と支援欲求尺度の再検討については、田中(2003, 2005)は、依存欲求と支援欲求の構造とそれらの関連構造を実証的に明らかにし、依存欲求尺度と支援欲求尺度を作成している。まず、依存欲求尺度は、因子分析の結果や被調査者の負担を考慮し、尺度の全項目数を20項目とし、その内訳は、「情緒的依存」機能が6項目、「相談・コミュニケーション依存」機能が6項目、「道具的依存」機能が5項目、そして、「指導・アドバイス依存」機能が3項目であった。これらのうち、「指導・アドバイス依存」機能の項目数は、他の機能と比べて少ないことから、依存機能間で、項目数のバランスを取ることが望ましいと考えられる。そのために、現在の項目に、新たな項目を加えた尺度の改訂を行う必要がある。同様に、新たな支援欲求尺度を作成し、両尺度の信頼性と妥当性の検討を行う必要がある。

つぎに、②対人関係意識の実証的研究について、本論では、依存行動と支援行動のやりとりから成り立つ互惠的相互依存関係のあり方に対する態度として、互惠意識、返礼意識、損得意識を仮定し、これらを「対人関係意識」とした。依存欲求と支援欲求とについては、田中(2003, 2005)において、両欲求の構造とそれらの関連構造が実証的に明らかにされているが、対人関係意識の実証的な検討はおこなわれていない。諸井(1993)は、個人が共同の関係と交換的關係をどの程度志向するかに関する個人差変数として、共同的關係志向性と交換

の関係志向性(Clarkら, 1987)をあげ、この2つの関係志向性が独立であることを明らかにした。また、谷口と田中(2005)は、Sprecher(1992)の交換的関係志向性における利得過剰志向性と利得不足志向性を測定する尺度の日本語版を作成した。前者は、相手に与えた利益よりも多い利益を自分が得ていることにどの程度関心があるかを表し、後者は、相手に与えた利益よりも少ない利益を自分が得ているということにどの程度関心があるかを表す。本論における対人関係意識である「返礼意識」は利得過剰志向性に、「損得意識」は利得不足志向性に相当すると考えられる。Sprecher(1992)や谷口と田中(2005)の研究を参考にしながら、互惠意識、返礼意識、損得意識の3つの意識の定義を基に、対人関係意識を測定する尺度を作成し、対人関係意識の構造を明らかにし、さらに、依存欲求、支援欲求、そして、対人関係意識の相互規定関係を実証的に検討することが必要である。

最後に、③互惠的相互依存関係を説明する影響過程パターンの実証的検討について、本論では、これまでの援助行動研究、例えば、援助経験や被援助経験がその後の援助に与える影響(西川, 1985; 1986; 1998; 高木, 1997)や援助行動の意思決定モデル(松井, 1998)、あるいは、援助行動における心理的負債感に影響を与える要因(相川, 1984; 1987; 1988)などの知見を参考にして、また、Clarkら(1979)の共同的關係と交換的関係とに対応させて、互惠的相互依存関係の形成を説明する3つの影響過程パターン、すなわち、互惠意識ループ、返礼意識ループ、そして、損得意識ループの影響過程パターンを仮定した。そして、各影響過程パターンについて、衡平理論における自他の利得の均衡状態がもたらす内的な展開を推定した。しかし、思弁的に構築された3つの影響過程は、それぞれについて、実証的な裏づけを行う必要がある。そのためには、面接調査や自由回答方式の質問紙調査、あるいは、質問紙による場面想定法により得られた、具体的な依存や支援の場面における被験者の内的影響過程に関するデータを、多変量解析を用いて詳細に検討することが

考えられる。

文 献

- 相川充 1984 援助者に対する被援助者の評価におよぼす返報の効果 心理学研究, 55(1), 8-14.
- 相川充 1987 被援助者の行動と援助 中村陽吉・高木修(編) 他者を助ける行動の心理学 光生館 pp.136-145.
- 相川充 1988 被援助利益の重みと援助コストの重みの比較 心理学研究, 58(6), 366-372.
- Adams, J. S. 1963 Toward an understanding of inequity. *Journal of Abnormal and Social psychology*, 67, 422-4336.
- Adams, J. S. 1965 Inequity in social exchange. *Advances in experimental social psychology*, 2, 267-299.
- Byrne, D. & Nelson, D. 1965 Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-63.
- Clark M. S. & Mills, J. 1979 Interpersonal attraction in exchange and communal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 12-24.
- Clark, M. S., Ouellette, R., Powell, M. C., & Milberg, S. 1987 Recipient's mood, relationship type, and helping. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 94-103.
- 藤田紘一郎 1997 共生の意味論—バイキンを駆逐してヒトは生きられるか? 講談社
- Gouldner, A. W. 1960 The norm of reciprocity; A preliminary statement. *American Sociological Review*, 25, 161-178.
- Greenberg, M. S. 1980 A theory of indebtedness. In K. Gergen, M.S. Greenberg, & R. Willis (Eds.), *Social exchange*. John Wiley & Sons.
- Greenberg, M. S. & Frisch, D. H. 1972 Effects of intentionality on willingness to reciprocate a favor. *Journal of Experimental Social Psychology*, 8, 99-111.
- Gurian, J. P. 1984 Dependency In J. Gould & W. B.

- Kolb(Eds.) *A Dictionary of Social Sciences*. New York: Free Press. pp.189-190.
- ジョンソンF. A. 江口重幸・五木田紳 (訳) 1997 「甘え」と依存－精神分析的・人類学的研究－弘文堂
(Johnson. F. A. 1993 *Dependency and Japanese socialization Psychoanalytic and anthropological investigation into AMAE*. New York University Press.)
- 松井豊 1998 援助行動の意思決定過程モデル
松井豊・浦光博 (編) 人を支える心の科学 誠信書房 pp.79-113.
- 諸井克英 1993 親密な関係の社会心理学(1) : 共同的関係と交換的關係 人文論集 (静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告), 44(1), 1-35.
- Nemeth, C. 1970 Effects of free versus constrained behavior on attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 302-311.
- 西川正之 1985 返礼義務感におよぼす援助意図性, 援助成果, および援助出費の効果 心理学研究, 57(4), 161-165.
- 西川正之 1986 補償的返礼行動におよぼす加害の程度と援助意図性の効果 実験社会心理学研究, 24(2), 214-219.
- 西川正之 1997 主婦の日常生活における援助行動の研究 社会心理学研究, 13(1), 13-22.
- 西川正之 1998 援助研究の広がり 松井豊・浦光博 (編) 人を支える心の科学 誠信書房 pp.115-148.
- 島田泉・高木修 1994 援助要請を抑制する要因の研究-1-状況認知要因と個人特性の効果について 社会心理学研究, 10(1), 35-43.
- Sprecher, S. 1992 How men and women expect to feel and behave in response to inequity in close relationships. *Social Psychology Quarterly*, 61, 220-231.
- Stierlin, H. 1959 The Adaptation to the 'Stronger' Person's Reality. *Psychiatry*, 22(2), 143-152.
- 高木修 1997 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, 29(1), 1-21.
- 高木修 1998 セレクション社会心理学－7 人を助ける心－援助行動の社会心理学－サイエンス社
- 田中優 2003 依存欲求尺度の作成, および, 信頼性と妥当性の検討 大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究, 4, 229-239.
- 田中優 2005 互恵的相互依存関係に関する予備的研究－依存欲求と支援欲求の構造, および, 互恵的相互依存関係過程モデルの提案－大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究, 6, 223-232.
- 谷口弘一・田中宏二 2005 サポートの互恵性と精神的健康との関連に対する個人内発達の影響－利得不足志向性および利得過剰志向性の発達の變化－ 対人社会心理学研究, 5, 7-13.
- Tesser, A., Gatewood, R. & Driver, M. 1968 Some determinants of gratitude. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 233-236.

謝 辞

本論文は、関西大学大学院社会学研究科博士論文「互恵的相互依存関係の研究」(未公開)の一部を加筆・修正したものである。本研究を進めるにあたり、多大な御指導を賜りました高木修教授(関西大学)に、深く感謝申し上げます。